

座談会「ぼそぼそ人文学—ほぐれる、つながる、ひらかれる」参加記

対話者：新田啓子、福嶋亮太、加藤喜之 司会：松原宏之

2025年4月24日に行われた、人文研究センター主催の座談会「危機の時代の人文学」に参加させていただきました。この座談会では、文芸・思想専修の福嶋亮太先生、キリスト教学科の加藤喜之先生、英米文学専修の新田啓子先生が、それぞれの専門に基づいて、文学・宗教・政治という事なる観点から、今日の世界における「危機」に人文学はいかに応答しうるかを語られた。

お話の中で特に印象に残ったのは、宗教は一見周縁化されているように見えても、現代社会において依然として影響力を持ち続けているという加藤先生の指摘だった。宗教はもはや教団や明確な教義に基づくものばかりではなく、消費社会のなかでヨガや占い、御朱印集めといったことを通じて、世俗的な日常に姿を変えて残っているというお話は、新鮮だった。私はその話を聞きながら、以前タイムスリップ映画を観たときのことを思い出した。登場人物は、些細な行動をいくらでも改変できても、恋人の死だけは避けられなかった。鑑賞後、「なぜ死だけは変えてはいけなかったのか」と考え込んだ自分の内に、人の運命を定める神のような存在を無意識に想定していたことに気づいた。この体験を振り返り、宗教が強く意識されなくとも私たちの思考の前提として今も根強く存在しているということを、加藤先生の話と重ねて実感した。

福嶋先生の文学論もまた印象深かった。文学は思想書とは異なり、具体的な人間や感情の描写を通じて社会に潜むイデオロギーや政治的無意識を拾い上げる力を持つとおっしゃった。新田先生の言葉を借りると、「個々の人間がなぜそこに生きているのか、なぜそこに住んでいるのかといったこと」を文学は描き出す。私はそのような文学の可能性を素直にうれしく思った。長く読み継がれてきた文学というのは、その具体的な描写から個人の感情に届きつつ、社会のイデオロギーを写す普遍性をもっているのだろうと思う。

また、加藤先生がおっしゃっていたことの中でもう一つ印象に残っているのが、中世のキリスト教が「文明宗教」として、政治や軍事と密接に関連していたという指摘だ。そして、それこそが、実は現代のキリスト教の姿により近いのではないか、というご意見だった。その一方で、近代以降のリベラリズムの中では、スピノザが構築したような宗教、すなわち「市民としての道徳」としての宗教観が主流になっていった。これは、私たち日本人の宗教観とも通じるものがある。しかし加藤先生は、そのようなリベラルな宗教観が現在では破綻しつつあり、宗教が本来持っていた力や姿を取り戻しつつあるのではないかと、とも指摘されていた。この点は、福嶋先生が例として挙げられていた「戒厳令」の話とも重なる。ある種、時代錯誤的に見える物語や言説が再び登場していることは、現代の社会が直面している変化の表れのように感じる。

実際、トランプ大統領が GAF A などの大企業に対して積極的に政策を働きかけたり、福音派など特定の宗教グループとの結びつきを強めたりしている姿を見ながら、私は、宗教・政治・商業といった本来別々の領域が、アメリカ社会において一体となって動いているような印象を受け、強い違和感を覚えていた。先生方のお話を伺い、その違和感の正体が少し見えたような、腑に落ちる感覚があった。

さらに、トランプ氏が大統領令を通じて次々と政策を進めている状況を振り返ると、リベラリズムの破綻の先に、ある種のファシズム的傾向が再興しているようにも思える。それはアメリカに限らず、世界的な潮流として日本にも影響を及ぼしているのではないかと感じた。もちろん、アメリカと日本では政治制度や社会構造は大きく異なるが、それでもアメリカで起こっていることを対岸の火事として無関係に片づけることは、もはやできないのではないかと感じている。

今回の座談会では社会科学とはまた異なった、人文学ならではの社会へのアプローチについてお三方のお話を聞くことができ、非常に貴重な機会となった。人文学を学ばせていただいている一員として大きな刺激になったし、文学だけではなく、政治の領域にも関心を持ちながら今後も学びを深めていきたいと思っている。次回の座談会にもぜひ参加させていただき、さらに学びを深めたい。

文学部文学科文芸・思想専修 2 年 中野楽々、内田くるみ